

北海道伊達高等学校

課程 全日制
 学科 普通科
 生徒数 408名

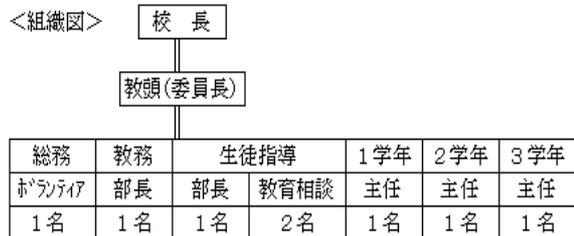
1 取組の特徴

ホームルーム活動、生徒会活動等におけるコミュニケーション能力を育む活動やボランティア活動などの体験的な学習を通して、生徒の人間関係を形成する力やコミュニケーション能力を高めるとともに、自己有用感を育成する指導の改善・充実を図る。

2 取組のねらい

- 1 コミュニケーション能力を育む活動等の組織化・体系化
- 2 コミュニケーション能力等に関するアセスメントの知識や手法の習得

<組織図>



3 取組の経過

【5月】

- ・長流川河口清掃 (1年)
- ・薬物乱用防止街頭啓発 (3年)

【6月】

- ・観光客動向調査協力 (2年)
- ・宿泊研修のホームルーム諸活動 (1年)
- ・第1回「ほっと」・「アセス」(全学年)

【8月】

- ・伊達市武者祭り市民山車参加 (野球部等)

【9月】

- ・「ほっと」・「アセス」研修会 (教員)

【10月】

- ・亶理町・亶理高校視察訪問 (生徒会)

【11月】

- ・市障害者スポーツ大会運営補助 (1年)
- ・第2回「ほっと」・「アセス」(全学年)、校内研修「SCによる事例研究」(教員)
- ・伊達地区学校ネットワーク会議 (伊達市内全学校参加) での成果発表

【12月】

- ・星の丘小中学校クリスマスコンサート (吹奏楽局)

【2月】

- ・星の丘小中学校剣道教室 (剣道部)
- ・伊達市雪祭りボランティア(2年)、第3回「ほっと」・「アセス」(1、2年)
- ・老人ホームボランティア(1、2年)

4 取組の内容

1 長流川河口清掃ボランティア

- (1) 日時：5月14日(火) 5、6校時
- (2) 対象：1学年生徒(143名)
- (3) ねらい：野鳥の繁殖地である長流川河口の清掃活動を通し、自然環境保全・生命尊重に寄与する精神を育てるとともに、清掃ボランティアの達成感や成就感、自己有用感等を人間関係を形成する資質養成等に役立てる。



- (4) 成果：① 事後アンケートには、「長流川が野鳥の繁殖地である理由を理解することができた。」「友だちと力を合わせて大きなゴミを取り除いたので、気持ちがよかった。」「今までこんなに働いたことがなかったので疲れたが、来年もまたやりたい。」などの感想があった。
- ② 各企業や団体等から参加されている方々や普段接する機会がない50代・60代の異世代の方々と交流する貴重な機会となった。

4 取組の内容

2 宮城県亶理高校訪問・亶理町視察及び研修成果発表会

- (1) 日 時：10月18日（金）、19日（土）：亶理高校訪問
11月21日（木）：研修成果発表会
- (2) 対 象：生徒会執行部生徒6名：亶理高校訪問
全校生徒：研修成果発表会

(3) ねらい

- ① 亶理高校学校祭を見学したり亶理高校生徒会役員と交流することを通して、学校行事の企画・運営や、ボランティア活動など各種の社会参画等について理解を深める。
- ② 亶理町やその周辺地域の文化遺産を直接見聞することを通して、亶理高校が地域の中で確立した校風について理解を深める。
- ③ 生徒会執行部生徒が東日本大震災後の復興の様子を直接見聞した内容を、後日、研修成果発表会において全校生徒へ伝え、地域の中での自己の在り方生き方について理解や自覚を深めさせる。

(4) 成 果：

研修成果発表会では、生徒会執行部の生徒が亶理高校との交流の様子や亶理町の復興について発表し、全校生徒が東日本大震災後の地域の復興について理解を深めるとともに、自らが住む地域、及び自分自身の在り方生き方について考えるよい機会となった。



○ 参加した生徒の感想

- ・津波の傷跡を見て、自分たちにはできることは何か。姉妹校として何ができるのか。多くのことをみんなに訴えようと思う。
- ・仮設住宅に住む方からお話を伺い、生と死についての考え方が変わった。伊達高校のみんなにも命の大切さを語りたい。

5 次年度に向けて

1 成果

- (1) 多くの生徒が他人の言動や考え方に興味・関心がなく、自己中心的な考え方に固執する傾向が見られるが、やり甲斐を感じられること、他者に感謝されるようなことには前向きに取り組むことができるようになってきている。
- (2) 「ほっと」の結果を個人面談等の資料として活用し、HR指導等に役立てている。
- (3) 欠席日数が減った。(のべ2781日→のべ1844日)
- (4) 保健室の利用者について、メンタルを理由とする相談者が減った。(212人→190人)
- (5) 生徒会役員が「伊達高生が責任と義務を果たし、街の人から高い評価を受けるような学校にしたい。」等の発言をするなど、自ら考えて行動しようという意欲が育ってきた。また、ボランティア活動ではホームルームのリーダー層ではない生徒も参加するようになり、「来年も同じ行事があれば、ボランティアとして参加したい。」等の感想を述べるなど、少しずつではあるが積極的に各種活動に参加しようとする意欲が育ってきた。
- (6) 様々な体験や思索の機会を通して自らの考えを深めることができた。発達段階に対応した「ねらい・内容・振り返り」を準備することで、規範意識の定着や自己指導能力の萌芽など、生徒の変容を見ることができた。

2 課題

- (1) 個別指導と集団指導のバランス
 - ・「ほっと」を活用した定期的な調査結果を「予防的指導」に生かすだけでなく、「成長を促す指導」に活用することを、教員間の共通理解とする必要がある。
 - ・生徒の能力・適性、興味・関心、家庭状況が多様であることから、集団指導を通した「個の育成」に十分留意する必要がある。なお、その際、生徒一人一人の特性に合わせて、「成長を促す個別指導」・「予防的な個別指導」・「課題解決的な個別指導」のいずれかに力点を置いた指導を心がける必要がある。
- (2) 体験的な活動の機会を増やす必要がある。
 - ・ボランティア活動のみならず、授業のなかでグループワークやペアワークを積極的に取り入れて、豊かな人間関係を作りながら、成就感・達成感等を味わわせる指導を積極的に展開する必要がある。

北海道追分高等学校

課程 全日制
 学科 普通科
 生徒数 78名

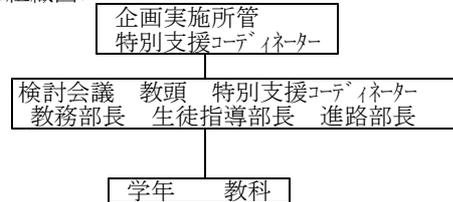
1 取組の特徴

スクールカウンセラー（以下SC）・パートナーティーチャー（以下PT）を交えた事例検討会により、個々の生徒へ対応した支援を行うとともに、コミュニケーションスキルアップのための取組を学校全体で推進する。

2 取組のねらい

- 1 生徒集団の実態の的確な把握と速やかな課題解決
- 2 コミュニケーションスキル向上を意識した教科指導やピアサポートトレーニングの実施に向けた教職員の力量の向上
- 3 生徒の表現力及び自己有用感の向上

<組織図>



3 取組の経過

- | | |
|---|---|
| <p>【4月】ピアサポート研修（生徒会役員、学級代表）</p> <p>【5月】教科学年生活会議</p> <p>【6月】ピアサポート研修（生徒会役員、学級代表）
 職場体験学習（2年）
 子ども理解支援ツール「ほっと」実施</p> <p>【7月】職場体験学習報告会（2年）
 学校祭係活動
 ボランティア活動（グループホーム夏祭り3回）</p> <p>【9月】校内研修</p> | <p>【10月】見学旅行</p> <p>【11月】見学旅行報告会
 ピアサポート研修（生徒会役員、学級代表）</p> <p>【12月】教科学年生活会議（PT、SC参加）
 体育大会学級活動</p> <p>【2月】年度末反省会議
 子ども理解支援ツール「ほっと」及びアセス実施</p> |
|---|---|

4 取組の内容

- 1 教科学年生活会議・校内研修
 - (1) ねらい：「ほっと」の結果を基に学級集団の傾向を確認するとともに、専門家であるPT、SCを交えて、学級集団や個々の生徒へのアプローチの方法を検討する。
 - (2) 対象：教員・SC・PT
 - (3) 内容
 - ① 教科学年生活会議
 - 5月13日 入学生の様子を中心に情報交流
 - 12月13日 1年間の生徒の様子について情報交流、PT、SCより助言
 - ② 校内研修
 - 9月19日 「ほっと」結果から学級の様子と課題、解決の方策について検討
- 2 コミュニケーションスキル向上を意識した教科指導・ボランティア活動の推進
 - (1) ねらい
 - 外部の方と交流する体験や、学習内容のまとめと発表を行う場面を設定することを通して、個々の生徒の表現力の向上を図る。

(2) 内 容

- ① 職場体験学習と報告会（2年）
- ② 見学旅行（英語課題、海外の人への英語によるインタビュー）・報告会（2年）
- ③ 選択授業における取組
 - ・生涯スポーツ（3年）：町内パークゴルフ協会との交流
 - ・生活福祉援助技術（3年）：町内養護老人施設における体験学習
 - ・ピアサポート（2年）：町内保育園における体験学習
- ④ 町内施設におけるボランティア活動
 - ・ノーザンホースパークマラソン走路ボランティア（15名）
 - ・福祉施設夏祭りボランティア（3回のべ15名）
 - ・安平町ロビーコンサートアイスクャンドル制作・設営（8名）



(3) 成 果

各種の体験的な活動の実施、及び報告会におけるプレゼンテーション形式の発表場面の設定により、生徒に自己表現することに対する自信を深めさせることができた。

3 校内リーダー研修におけるピアサポートトレーニング

(1) ねらい

コミュニケーションスキルトレーニングを通してピアサポートの実践力を身に付けさせることにより、仲間の援助活動を行うことができるリーダーを育成する。

(2) 対 象 生徒会執行部・学級代表

(3) 内 容

- ① 自己紹介・他己紹介
- ② コミュニケーション一方向通行双方通行・傾聴訓練（聴く態度）
- ③ Iメッセージ・YOUメッセージ・アサーティブなコミュニケーション



○ 参加した生徒の感想

「言葉の言い方によって相手の気持ちが悪くなったり良くなったりと改めて難しいなと思った。でも楽しかった。」
「言葉の選択の大切さがわかった。」

5 次年度に向けて

1 成果

(1) 子ども理解支援ツール「ほっと」の結果で偏差値に向上が見られた項目

- ① 1年（挨拶や感謝：49.3→51.4、発言や説明：46.8→49.2、思いやり：49.8→51.4 拒否：47.5→50.0）
 - ・男子は、前期（6月実施）には、挨拶や感謝の項目が47.3と女子52.1に比べ低かったのに対し後期（2月実施）では50.2と上昇した。
 - ・女子は、ルールやモラルが48.1→51.1、リーダーシップが51.0→52.0へ上昇した。
 - ・全体的に、自分の気持ちや考えを表現しようとする意識に向上が見られた。
- ② 2年（発言や説明：49.3→52.0、仲間作り：49.1→51.9、学業：45.9→53.2、思いやり：49.1→51.6、リーダーシップ：48.6→54.8、相談：48.5→51.7）
 - ・男子は、前期には学業が45.5と低かったが55.1と上昇した。
 - ・女子は、思いやりが42.1→52.1、賞賛が49.1→53.4と上昇した。
 - ・学級内における仲間に対するコミュニケーションスキルが向上したことにより、学級が過ごしやすい場所となり、学業に対する意欲も増してきたと考えられる。

2 課題

- (1) アセスや「ほっと」を早期に実施して実態把握することにより、学校生活に対して無気力な生徒への対応を早期から行っていく必要がある。
- (2) コミュニケーションスキル向上の取組を、進学や就職に向けた面接や作文等の力量の向上に結び付けられるよう学校全体で計画的・継続的に実施し、最終的に進路実現につなげていく必要がある。

3 次年度へ向けて

(1) アセスや「ほっと」結果の早期活用

- ① 2、3年は、後期の結果を今年度中に分析して課題を確認し、4月からの学級経営に生かしていく。
- ② 1年は、前期の実施後直ちに結果を分析して学級の状況を把握し、教員間で課題解決に向けた意見交流を行って具体的な対策を検討し、早期の課題解決を図る。

(2) コミュニケーションスキル向上を意識した教育活動の継続

- ① ピアサポート研修内容を改善・検討するとともに、実施時間を十分確保することにより、生徒執行部や学級リーダーのさらなるスキルアップを図る。
- ② 各種学習活動の成果の発表機会と時間を十分確保することにより、生徒の自己表現力の一層の向上を図る。

北海道登別青嶺高等学校

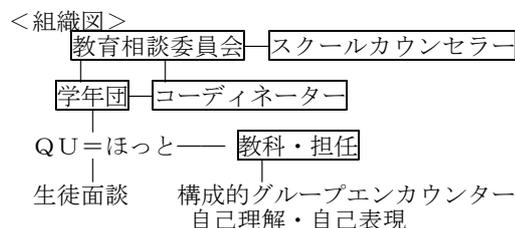
課程 全日制
 学科 普通科
 生徒数 457名

1 取組の特徴

Hyper-QUテストや「ほっと」を実施して有効な学級集団への働きかけについて検討するとともに、生徒指導、教育相談活動、授業における取組を通して、望ましい人間関係の構築を図る。

2 取組のねらい

- 1 Hyper-QUの分析によるきめ細かい生徒対応
- 2 「ほっと」の分析による生徒指導の取組の検証
- 3 スクールカウンセリングによる個別の生徒の困り感への対応
- 4 自己理解・自己表現を高める取組の推進



3 取組の経過

- 1 教育相談委員会の月例開催
- 2 スクールカウンセラーによる個別カウンセリング (年19回)
- 【4月】 宿泊研修時の集団カウンセリング
- 【6月】 QU実施：全クラス
- 【7月】 エゴグラムを活用した自己理解：3年
「ほっと」実施・全クラス…分析

- 【8月】 国語科
コミュニケーションスキルトレーニング：1年
- 【10月】 自己表現スキルアップ
見学旅行研修報告会：2年
職業調べクラス発表：1年
- 【11月】 外部講師によるマナー講座：2年

4 取組の内容

1 携帯電話預かり指導と人間関係能力の育成

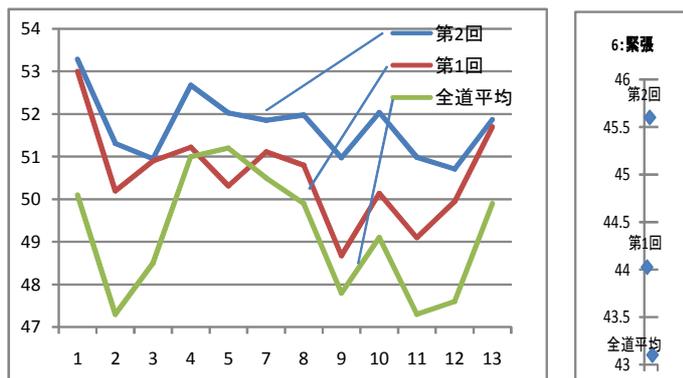
本校では平成23年度から学年進行で携帯電話預かり指導を行っている。この指導は日中の携帯電話使用を禁止し学習に集中させるとともに、メール等によるコミュニケーションではなく、友人と会話する機会を増やすことによる、直接のコミュニケーション力アップをねらいとした取組である。導入当初は抵抗感もあったようだが定着するにつれネットトラブル等の防止にもつながっており、生徒の理解も深まっている。



いじめなくそうキャンペーンポスター(生徒会作成)

2 「ほっと」の分析

すべての要素で全道平均を上回り、かつ、1回目より2回目が上回っている。特に、全道平均を大きく上回って項目は「発言や説明」「挨拶や感謝」「学業」であった。また1回目から2回目で伸びが大きかった項目は「助言や注意」「自律」「学業」であった。



3 教科の取組

1年 国語総合 コミュニケーションスキルトレーニング（ロールプレイ）

- (1) 2人1組で親役、子役を決める。
- (2) 子役は「新しいスマホを買って」とねだる。親役はそれを断る。（1分間）
- (3) 役割を入れ替えて実施後、2人で感想を話し合う。
- (4) 3人1組で親役、子役、見学者を決めロールプレイ（1分間）する。3人がすべての役割を経験できるよう3回行い、3人で感想を話し合う。

○ 生徒の感想

「おもしろかった、またやってみたい」「相手が納得することを言うのは難しい」
「親の大変さがわかった」「相手のいうことにすぐ言い返すのは大変だ」

○ 成果

- ・自分と違う立場に立つことで、自分とは違うものの見方で考えることができた。
- ・相手を納得させるための言い方を考えることで、自分の考えを深めることができた。

5 次年度に向けて

1 成果

- (1) 中途退学者数及び不登校生徒数の推移
 - ・不登校生徒は減少した。中途退学者も少ない数字のまま推移している。
- (2) その他の指標による評価
 - ・スタディーサポート等の結果から、本校入学後に学力が伸びていることがわかった。
 - ・いじめ実態調査でもいじめは全く認知されなかった。
- (3) 子ども理解支援ツール「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーション
 - ・スキルの概況
「ほっと」の結果は全道平均よりも高い値が得られた。13要素中「挨拶や感謝」「思いやり」「自律」の項目が特に高い値となった。中でも「助言や注意」「自律」は1回目に対して大きく上昇しており、本校の携帯電話預かり指導などの生活習慣の確立を土台にした生徒指導が効果を上げていると考えられる。
- (4) 生徒の変容した姿
 - ・「ほっと」の1回目と2回目の比較では「助言や注意」の伸びが大きく、しっかりした生徒指導が生徒相互の規範意識を醸成していると考えられ、単なる仲良し集団を脱却し、自律的集団が形成された。

2 課題

- (1) 個別カウンセリングが生徒にとって特別なことという誤解が生じている。
- (2) 日常的観察や声かけなど、教職員と生徒が触れ合う時間的余裕が不足している。

3 次年度に向けて

- (1) 教職員のアイメッセージによる表現やアサーションスキルをアップする研修を行う。
- (2) 「QU」や「ほっと」の分析力を強化し、取組と結果の関連を継続して研究する。

北海道富川高等学校

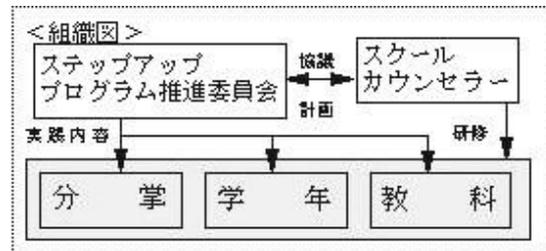
課程 全 日 制
 学 科 普通科・商業科
 生徒数 1 0 3 名

1 取組の特徴

昨年度からのピアサポート活動の充実を図り、授業や特別活動にソーシャルスキルトレーニングを導入するなど、活用の拡大を図るとともにキャリア教育プログラムにも位置付けた。

2 取組のねらい

- 1 定期的なピアサポートトレーニングの実施によるピアサポーターの育成
- 2 キャリア教育プログラムの一つとして位置付け、生徒のコミュニケーションスキルを向上
- 3 教員が生徒理解や教育相談を日常的に活用できる能力を身に付けるための研修の実施



3 取組の経過

- | | |
|--|--|
| <p>4月・宿泊研修施設（ネイパル洞爺）での集団カウンセリング（SGE）実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2年生 SGE(非言語のコミュニケーション) ・2年生商業科 ソーシャルスキルトレーニング（SST）（商品陳列時の来客対応） ・2年生商業科 ソーシャルスキルトレーニング（SST）（来客時の案内） <p>5月・教員研修（昨年度の反省と今年度の取組について）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1年生 SGE(他己紹介) ・ピアサポートトレーニング①、② ・2年生商業科 ソーシャルスキルトレーニング（SST）（飲食店の来客対応） <p>6月・ピアサポートトレーニング③、④</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1年生 SGE(自分を知る) <p>8月・調査（全学年に対して子ども理解支援ツール「ほっと」を実施）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2年生 ソーシャルスキルトレーニング（インターンシップに向けて） | <p>8月・ピアサポートトレーニング⑤</p> <p>9月・2年商業科 ソーシャルスキルトレーニング（SST）（電話の対応）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ピアサポートトレーニング⑥ ・2年商業科 ソーシャルスキルトレーニング（SST）（職場内のコミュニケーション） <p>10月・2年生 ソーシャルスキルトレーニング（SST）（見学旅行に向けて）</p> <p>11月・ピアサポートトレーニング⑦</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員研修（不登校生徒、別室登校生への対応） <p>12月・調査（全学年に対して子ども理解支援ツール「ほっと」を実施）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1年生 SGE（仲間を信頼しよう） ・ピアサポートトレーニング⑧、⑨ <p>2月・ピアサポートトレーニング⑩</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2年生 SGE（プラスのストローク） <p>3月・1年生 SGE（仲間へのメッセージ）</p> |
|--|--|

4 取組の内容

1 ソーシャルスキルトレーニング (SST) の活用

(1) ねらい

人間関係で予想されるトラブルを擬似的に体験し、対応する術を身に付ける。

(2) 対象

2年生 商業科10名 普通科 23名

(3) 主な実施内容

- ① インターンシップに向けて、気持ちのよい挨拶やお客様・会社の方との対応のトレーニング
- ② 見学旅行に向けて、グループ内で意見の相違が出たときの対応のトレーニング
- ③ 商業科の授業で、電話のかけ方・受け方などのトレーニング

(4) 成果

ソーシャルスキルトレーニング (SST) の特徴は、擬似的に人間関係で困難な体験ができることである。このトレーニングをとおして生徒は、社会での振る舞いについて考えることができた。



本校のピアサポーターは、胸にそろいのバッヂを付けています！

2 SGEによる自己開示と他者の認知

(1) ねらい

自分を表現する機会を作るとともに、自分とは違う他者の考えや行動を受け入れる機会をつくる。

(2) 対象

1年生 商業科21名 普通科14名

2年生 商業科10名 普通科23名

各学年で、総合的な学習の時間の時間やLHRを使って実施

(3) 実施内容

非言語のコミュニケーション、他己紹介、自分を知る、仲間を信頼しよう、プラスのストローク、仲間へのメッセージ

(4) 成果

自己開示はとても勇気のいることであるが、自分のことを伝えたり仲間のことを知ったりを重ねていくことで、自分の存在に自信を持つことができるようになり、自己肯定感が増した。



最近では、ピアサポーターがクラスのトレーニングでトレーナー役をやってくれたりします



2年生、LHRでのSGE「プラスのストローク」の様子

5 次年度に向けて

1 成果

(1) ピアサポート活動

まだまだ表だった活動はしていないが、部活動単位でトレーニングに参加してくれるなど、参加人数が増えてきた。

(2) コミュニケーションスキルトレーニング

S G EやS S Tをとおして擬似的に人間関係のトラブルを体験することで、コミュニケーションの大切さや他者への思いやり・気配りの必要性について考えるようになった。

(3) 子ども理解支援ツール「ほっと」の活用

年に2回実施した結果から、1年生では「挨拶や感謝」の項目で偏差値が40.9から46.0に、「思いやり」の項目が45.4から48.1に、「拒否」の項目が43.3から47.7へと上昇し、心の成長が見られた。

2 課題

- (1) 生徒への活動は充実してきたが、教員の活動はまだまだ一部の先生が中心となっていて、全体的なものへとなっていない。全体に波及させるための工夫や活用の啓発が必要である。
- (2) ピアサポーターの活躍の場を考え、活動の活性化が必要である。
- (3) どの教員でも取り組めるよう、実施内容の蓄積が必要である。

3 次年度に向けて

- (1) 子ども理解支援ツール「ほっと」を本格的に活用できるよう、分析の方法や結果に対する具体的な対応について、研修を深める。
- (2) 教員集団もだいぶ変わってきていることから、再度教員研修の充実をはかり、事業の必要性について理解を深める。

北海道大野農業高等学校

課程 全 日 制
 学科 農 業 科
 生徒数 3 3 6 名

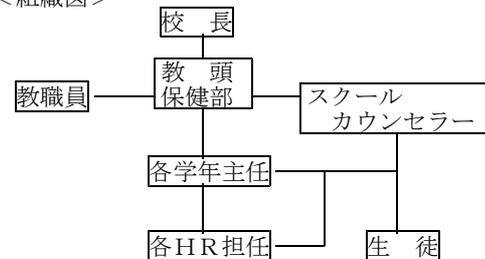
1 取組の特徴

- (1) 学校環境適応検査「アセス」の結果や学年別生徒理解会議の実施による生徒状況の把握。
- (2) 農業高校の特色を生かした販売会や異年齢交流の活動を通じた、コミュニケーションスキルと自己肯定感の向上。
- (3) スクールカウンセラーと教員のコンサルテーションによる生徒状況の把握。

2 取組のねらい

コミュニケーションが苦手な生徒や集団生活になじめない生徒、心的な悩みを抱えている生徒が多く見受けられることから、学校生活や卒業後の社会生活における円滑な人間関係を構築できるコミュニケーションスキルを身に付けること、自己有用感を向上させることを目的としている。

<組織図>



3 取組の経過

5月	第1回大野幼稚園との交流会 第1回特別支援学校との交流会 高齢者との草花交流会 学年別生徒理解会議 アンテナショップ「鹿島屋」開店(～11月)	10月	第3回、第4回大野幼稚園との交流会 学年別生徒理解会議 老人ホーム「美ヶ丘」収穫感謝祭ボランティア 食彩フェア販売会 緑園祭(学校祭)販売実習
7月	第2回大野幼稚園との交流会 第2回特別支援学校との交流会 学年別生徒理解会議	11月	交通安全事故なしキャンペーン
8月	学校環境適応検査「アセス」の実施 スクールカウンセラーによる支援(～2月)	12月	サンタクロース活動
9月	第3回特別支援学校との交流会	1月	1学年集団カウンセリング(宿泊研修)
		2月	学校環境適応検査「アセス」の実施(2回目)

4 取組の内容

1 北海道教育大学附属特別支援学校との交流会

- (1) 実施日：5月15日(水)、7月18日(木)、9月11日(水)
- (2) 対象：生活科学科1年
- (3) 内容：5月 ジャガイモ・枝豆・スイートコーンの苗の植え付け（本校農場）
7月 受注班・木工班・陶芸班・縫工班に分かれて作業学習（特別支援学校校舎）
9月 ジャガイモ・枝豆・スイートコーンの収穫と試食（本校農場）

(4) 成果と課題（○は成果、●は課題）

- 3回の交流を通して、コミュニケーションスキルの必要性和コミュニケーションのポイントを学ぶことができた。
- この経験を通して、ボランティア活動に興味を持つ生徒が増え、生徒の自己肯定感を高めるよい機会となった。
- 回数や時間に制限があることから、実施する内容を精選し、より一層効果的な取組となるよう工夫する必要がある。

(5) 生徒の感想から

- ・「種のまき方、水のまき方を教えた際に、相手に自分の説明が伝わったと思っていたが、実際には相手に伝わっておらず、説明することの難しさを実感した。」
- ・「上手にコミュニケーションをとることができなかったために、パートナーとなった人がとても戸惑っている様子だった。障がいのある人たちにとって、パートナーや仲間、家族等からのサポートがとても大切なものであることがわかった。」
- ・「初めは、これまで障がいのある人と交流したことがなかったので不安だったけれど、みんな親切だったので、安心して取り組むことができ、自分に自信がもてるようになった。」



2 農業高校食彩フェア販売会

- (1) 実施日：10月12日(土)
- (2) 対象：各学科代表生徒(25名)
- (3) 内容：
 - ・イトーヨーカドー函館店における生徒実習生産物の展示・販売（販売物の特徴及び商品説明）
 - ・食品加工の実演や各種体験コーナーの設置

(4) 成果と課題（○は成果、●は課題）

- 一般の人に対して緊張し接客が思い通りにできなかった体験を通して、販売や商品のPRができるようになるためには、豊富な知識が必要であり、普段の学習が大切であることを再確認できた。
- 生徒が販売活動の経験や学んだことを日常の学習の中で生かすなど、事前指導、事後指導のさらなる充実が必要である。



3 本校教員による集団カウンセリングの実施

- (1) 実施日：1月28日(火) 宿泊研修1日目
- (2) 対象：1学年
- (3) 内容：フリーウォーク、バースデーライン

(4) 成果と課題（○は成果、●は課題）

- 本校教員がリーダーとなり、学年の生徒を対象に、集団カウンセリングを実施することができた。
- 集団カウンセリングに意欲的に参加できない生徒へ対応するため、別の方法によるカウンセリングの実施を検討する必要がある。



4 取組の内容

4 「アセス」の分析結果について

- (1) 実施日：1回目は8月22日(木)、2回目は2月6日(木) いずれもHRの時間に実施
- (2) 対象：1回目は全学年、2回目は1学年と2学年
- (3) 検査結果
 - 1学年：8月と2月の結果を比較すると、対人的適応についてのクラス共通の結果は見られなかった。
 - 2学年：8月と2月の結果を比較すると、全てのクラスにおいて「友人サポート」と「向社会的スキル」の適応群の割合が多くなった。
 - 3学年：昨年度(平成24年5月に実施)の結果と比較すると、ほとんどのクラスにおいて「友人サポート」「向社会的スキル」「非侵害的關係」の適応群の割合が多くなった。

5 次年度に向けて

1 成果

- (1) 中途退学者数及び不登校生徒数の推移
中途退学者数及び不登校生徒数は減少した。
- (2) その他の指標による評価
 - ・保健室年間利用者数は減少した。
 - ・「一人当たりの欠席日数」は減少した。
 - ・ボランティア活動の参加人数は増加した。
- (3) 学校環境適応検査「アセス」実施により把握した生徒の学校適応の概況
「友人サポート」「向社会的スキル」の「適応群」の割合が増えたことから、友人関係が良好だと感じたり、友だちとの関係をつくるスキルをもっていると感じている生徒が増えていると考えられる。
- (4) 生徒の変容した姿
コミュニケーションが苦手な生徒や集団生活になじめない生徒が、本校における異年齢交流や販売活動を通して、コミュニケーションスキルを身に付けるとともに、社会人としてのマナーを意識する姿勢が見られるようになった。また、進路の活動において、積極的に行動し、自分の希望どおりに進路を実現する生徒が増えた。

2 課題

- (1) アセスなどの検査結果に基づいたアセスメントによる生徒指導の結果について把握し分析する必要がある。
- (2) 入学当初から高校生活に意欲を持たない生徒へのアプローチ方法の確立を図る必要がある。

3 次年度に向けて

- (1) 今まで以上に、生徒自身が意欲的に取り組める交流活動の工夫・改善を図る。
- (2) スクールカウンセラーからのアドバイスを取り入れ、より効果的に学校環境適応検査を活用する。

北海道森高等学校

課程 全日制
学科 総合学科
生徒数 334名

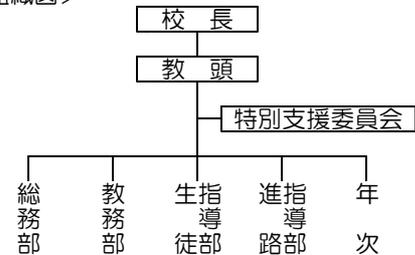
1 取組の特徴

スクールカウンセラーと連携したコミュニケーションスキル養成トレーニングを1、2年次を対象に実施する。

2 取組のねらい

- (1) 予防的・開発的な教育相談の手法による生徒への支援
- (2) 集団カウンセリングによる人間関係づくりの支援
- (3) 定期的なトレーニングによるコミュニケーションスキルの育成

<組織図>



3 取組の経過

- | | |
|-------|---|
| 4月 | ・ 宿泊研修におけるソーシャルスキルトレーニング
・ 子ども理解支援ツール「ほっと」を全年次を対象に実施 |
| 5月 | ・ スクールカウンセラーと連携したコミュニケーションスキル養成トレーニングを1年次を対象に実施 |
| 6月～1月 | ・ ボランティア活動等におけるコミュニケーションスキルの活用 |
| 11月 | ・ スクールカウンセラーと連携したコミュニケーションスキル養成トレーニングを2年次を対象に実施 |
| 12月 | ・ 子ども理解支援ツール「ほっと」を全年次を対象に実施 |

4 取組の内容

1 宿泊研修におけるコミュニケーショントレーニング

1年次生が入学直後の4月に実施した宿泊研修のプログラムの中で、よりよい人間関係を築くためのコミュニケーショントレーニングを実施した。また、宿泊研修前に「ほっと」を実施し、各クラスの傾向を分析して、宿泊研修における生徒指導の参考にした。入学直後ということもあり、初めは遠慮がちでぎこちない雰囲気だったが、次第になごやかになり、クラスの中で人間関係を深めることができた。



【宿泊研修の様子】

2 スクールカウンセラーによるコミュニケーショントレーニング

5月に1年次生、11月に2年次生を対象に、アサーショントレーニング（表現力を育む集団体験学習）を中心としたプログラムを、スクールカウンセラーに来校いただき、実施した。個々の生徒が、コミュニケーションの重要性に気づき、自己開示によって温かな人間関係を形成する力や高校卒業後も社会に通用するコミュニケーションスキルを伸ばすことができると考えている。



【コミュニケーショントレーニングの様子】

3 地域と連携したコミュニケーションスキルを活かす機会

地元商店街や老人ホーム等におけるボランティア活動を活性化させ、身に付けたコミュニケーションスキルを活かす機会ととらえて活動した。地域住民とふれあうことにより、学習内容を振り返ることができたり、高齢者の話し相手になったりすることで、人と人のふれあいの大切さを感じることができた。



【ボランティア活動の様子】

5 次年度に向けて

1 成果

- (1) 中途退学者数及び不登校生徒数の推移
中途退学者数及び不登校生徒数のいずれも減少した。
- (2) その他の指標による評価
ボランティア活動への参加者数が大幅に増加した。
- (3) 子ども理解支援ツール「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況
「発言や説明」「リーダーシップ」については、トレーニングにより改善が見られたが、「緊張」「助言や注意」については、依然として数値が低く、日常生活における継続的な指導が必要である。
- (4) 生徒の変容した姿
 - ・コミュニケーションスキルは、トレーニングにより向上することを理解できた。
 - ・コミュニケーション不足による些細な生徒間トラブルが減少した。

2 課題

- (1) トレーニングで得たコミュニケーションスキルを日常生活においても使えるよう習慣化していく必要がある。
- (2) 日常会話において、コミュニケーションスキルを向上させるような指導体制を構築する必要がある。

3 次年度に向けて

予防的・開発的な教育相談の手法による生徒への支援のより一層の充実を図る。

北海道函館中部高等学校

課程 定時制
 学科 普通科
 生徒数 142名

1 取組の特徴

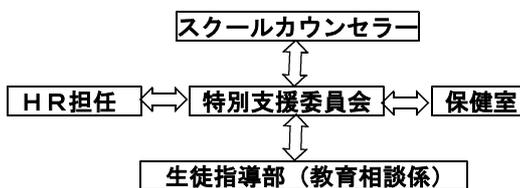
低学年（1・2年生）で人とつながる力をつくり、3・4年生で社会とつながる力をつくる。4年間という定時制の特長を生かし、基礎学力を身に付け、自信を持ち進路を開拓する生徒を育てる。

2 取組のねらい

低学年（1・2年生）で人との付き合い方を学び、コミュニケーション能力を育成するとともに、クラス中での居場所を確保する。そのために、グループエンカウンター時間を1年生、2年生の順に多く配当するほか、3・4年生には卒業後の進路決定を意識したソーシャルスキルトレーニングを中心に行う。

個別カウンセリングにおいては、スクールカウンセラーによる専門的なアドバイスと支援を提供し、教職員で生徒の情報を共有することにより組織的な支援を行う。

<組織図>



3 取組の経過

年度中旬

2人のスクールカウンセラーに依頼し、構成的グループエンカウンター（SGE）32時間、個別カウンセリング14時間を計画した。時間数としては昨年度の半分以下となったことから、取組内容の検討を行った。

年度後半

今年度の最初の取組が9月になったことから、計画を見直し、指導が必要な学年から優

先的にSGEを実施した。

見学旅行など各学年の行事との関連を深め有効な取組になるように工夫した。

年度末

計画通りに進めることができ、生徒への効果も顕著であった。個別カウンセリングは生徒からのニーズが高く、予定時間では不足し、時間を追加して実施するほどであり、改めてカウンセリングの必要性を確認した。

4 取組の内容

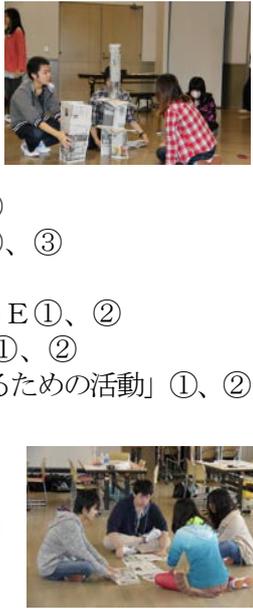
コミュニケーションスキル（特に質の向上）の育成を図るため、次の取組を行った。

1 個別カウンセリング

- (1) 実施時間：授業前（15：30～17：20）
- (2) カウンセラー：1名で対応 授業前 1～2名
- (3) 相談内容：家庭生活、学校生活、友人関係、進路、体調、アルバイトなどの相談
 アサーショントレーニング
 相談生徒に関してHR担任・養護教諭との情報交換、教頭への報告

2 SGE（構成的グループエンカウンター）

- (1) 実施時間：総合的な学習の時間やLHR
- (2) スクールカウンセラー：1名
- (3) 実施内容

- | | |
|--|---|
| <p>9月 【全学年】「ほっと」1回目実施（集計後SCに分析依頼）
 【4年】進路に役立つソーシャルスキルトレーニング
 【2年】宿泊研修に向けてソーシャルスキルトレーニング①</p> <p>10月 【2年】宿泊研修に向けてソーシャルスキルトレーニング②、③
 【2年】宿泊研修におけるストレスマネジメント教育
 【3年】見学旅行に向けてのよい人間関係形成のためのSGE①、②</p> <p>11月 【1年】人間関係形成のためのSGE「言葉かけや行動」①、②</p> <p>12月 【1年】人間関係形成のためのSGE「人間関係をより良くするための活動」①、②
 【1年】人間関係形成のためのSGE「人間コピー」</p> <p>1月 【3年】人間関係形成のためのSGE「友人をサポートする」
 【3年】人間関係形成のためのSGE「助けられ上手になる」</p> <p>2月 【1年】人間関係形成のためのSGE「間違い探し（協力する）」
 【1年】人間関係形成のためのSGE「葉書コラージュ」</p> <p>3月 【1～3年】「ほっと」2回目実施（集計後SCに分析依頼）</p> |  |
|--|---|

5 次年度に向けて

1 成果

- (1) 中途退学者数及び不登校生徒数の推移
 昨年度と同様に、不登校生徒数、中途退学者数ともに減少した。
- (2) その他の指標による評価
 昨年度よりの保健室利用者数は減少した。
- (3) 子ども理解支援ツール「ほっと」実施により把握した生徒のコミュニケーションスキルの概況

学年別の変化のあった項目

	高くなったもの	低くなったもの
1年生	リーダーシップ、拒否	緊張、相談、学業
2年生	拒否	緊張、思いやり、相談
3年生	助言や注意	緊張、思いやり、相談

以上の結果から、困っている人のために思いやりのある行動をとることや、困ったことや悩みを友達に打ち明けられることができるような人間関係を築くスキルを育成する取組を強化したい。

- (4) 生徒の変容の姿
 - ・学年が進むにつれ、生徒の成長を確認できた。特に、卒業学年に近づくほど「自立と自律」を生徒自身が意識し、最終的には、卒業年次には「大人になる覚悟」を決めて大きな成長を遂げる者も多い。
 - ・SGEの実践を通して、人とのつながりができることにより、学校の中に自分の居場所ができ、さらに、個別カウンセリングを通して、人に受け入れてもらっていることを感じたり適切な助言をもらえたりすることで、元気に学校生活を送ることができる生徒が増えた。

2 課題

- (1) 事業の取組や成果について、校内において有効に活用するための校内体制を整備・充実を図る必要がある。
- (2) 研修会や実践により、教員それぞれが集団カウンセリングについての指導力をさらに伸ばす必要がある。

3 次年度に向けて

この2年間で蓄積したノウハウや経験を基礎として、次年度はさらに取組を発展させ、内容の充実を図りたい。また、今後、個々の取組を整理し系統立てることにより、教員の誰が担当しても共通して指導できる校内体制の整備・充実を図りたい。

北海道上ノ国高等学校

課程 全日制
 学科 普通科
 生徒数 91名

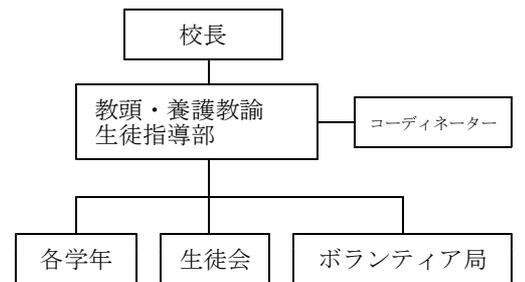
1 取組の特徴

- ・各学年におけるコミュニケーションスキルトレーニングを推進するとともに、生徒の対人適応能力の育成の充実を図るボランティア活動に取り組む。
- ・地域社会や小・中学校と連携したボランティア活動により、生徒のコミュニケーション能力、自己理解能力、他者理解能力及び共感力の向上を図る。
- ・教員のカウンセリング能力の向上を図り、全教員による教育相談を推進する。

2 取組のねらい

子ども理解支援ツール『ほっと』及び学校環境適応尺度『アセス』の調査結果を活用し、教員による個別相談を一層充実させるとともに、生徒同士が互いに認め合うことができる機会を授業やHRにおいて意識的に設けた。その結果、人間関係の広がりや学校に対する安心感、自己理解力が深まり、望ましい人間関係づくりと学校不適応の未然防止が図られた。今年度は、進路での自己実現や学校・地域での心地良い関係づくりを推進し、生徒が自己理解や他者理解を深め、対人適応能力や社会性の改善を図る。

<組織図>



3 取組の経過

- | | |
|---|---|
| <p>4月 全校クリーン作戦
(全校生徒によるボランティア清掃)</p> <p>4月 子ども理解支援ツール『ほっと』の実施①
学校環境適応尺度『アセス』の実施①</p> <p>7月 発達支援ボランティア活動 (月1回)
(ボランティア局による小学生との交流)</p> <p>8月 集団カウンセリング① (全校生徒対象)</p> <p>9月 集団カウンセリング② (1学年対象)</p> <p>9月 集団カウンセリング③ (2学年対象)</p> <p>10月 「本物の森再生植樹祭」</p> <p>10月 集団カウンセリング④ (3学年対象)</p> <p>10月 上ノ国町高齢者スポーツ大会ボランティア
(ボランティア局による手伝い)</p> <p>10月 集団カウンセリング⑤ (2学年対象)</p> | <p>10月 「交通安全キャンペーン」
(生徒会執行部、ボランティア局による小・中・高合同の活動)</p> <p>11月 集団カウンセリング⑥ (1学年対象)</p> <p>11月 集団カウンセリング⑦ (3学年対象)</p> <p>11月 集団カウンセリング⑧(全校生徒対象)</p> <p>12月 子ども理解支援ツール『ほっと』の実施②
学校環境適応尺度『アセス』の実施②</p> <p>12月 高齢者宛の年賀状作成
(ボランティア局によるふれあい活動)</p> <p>1月 「喫煙防止出前授業」(小学生)
(ボランティア局によるピア・サポート活動)</p> |
|---|---|

4 取組の内容

(1) 子ども理解支援ツール『ほっと』の分析結果概要

集団カウンセリング前に行った『ほっと』の分析結果から、1、3学年は13項目でほぼ全道平均並であったが、2学年はすべての項目において、全道平均を下回る状況であった。各学年4回の集団カウンセリングの後に実施した、12月の『ほっと』の結果によると、全学年ともリーダーシップの項目が飛躍的に伸びた。これは、グループワークを通して集団をまとめたり、リーダーとしての行動をとることに自信と自覚を持てたと考えられる。特に2学年は、すべての項目に改善がみられ、わずかではあるが学級の間人関係や対応に変化がおきていると考えられる。

(2) 集団カウンセリング⑧

- ①ねらい
- ・学校全体で実施する活動として、異学年と交流しやすい活動を行う。
 - ・グループになった際に決められた方法による自己紹介を行い会話をするきっかけをつくる。
 - ・グループで協力し共通の目標を達成する活動を行い、協力することの楽しさや達成感を得る。



②対象 全校生徒

③内容 「自己紹介ゲーム」、「あたたかい言葉かけスキル」、「新聞紙タワー」、「シェアリング」

④成果 様々な活動を通して、生徒同士が心が暖まる言葉を掛けることで、緊張感を和らげ、失敗しても認め合い、グループの全員が協力し合うことで楽しさと連帯感を感じることができた。

5 次年度に向けて

1 成果

ア 中途退学者及び不登校生徒数の推移

中途退学者及び不登校生徒数は、減少している。

イ その他の指標による評価

・保健室利用状況

	22年度	23年度	24年度
利用者数 (在籍数)	677人 (81人)	687人 (91人)	510人 (89人)

保健室利用者数が年々減り、落ち着いた学校生活となっている。

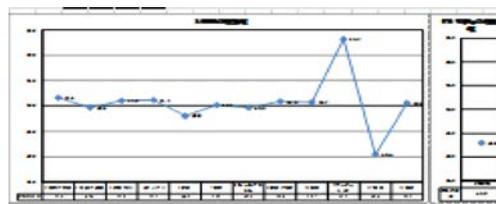
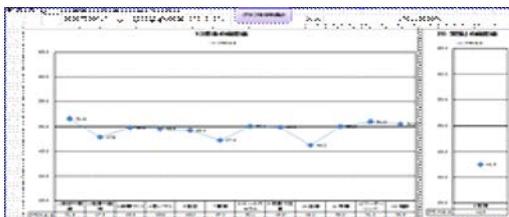
・生徒による学校評価

評価項目	24年度	25年度
友だちとの人間関係に満足している。	80.0%	85.7%
生活や進路などの悩みについて、先生方は十分に話を聞いてくれる。	88.0%	89.0%
敬語など、言葉を適切に使えるようになってきた。	79.0%	85.7%

教師の適切な指導により、生徒の自己肯定感や他者との良好な関係がみられた。

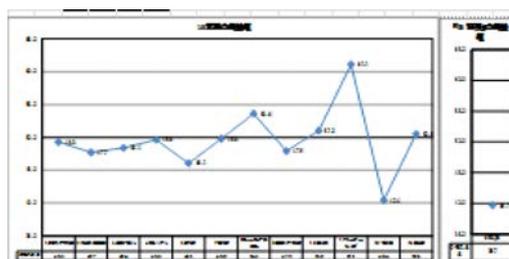
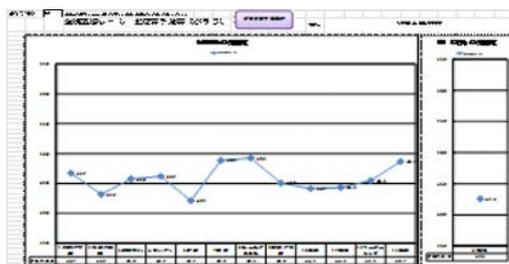
ウ 子ども理解支援ツール『ほっと』の結果の変化（7月と12月の比較結果）

・ 1 学年



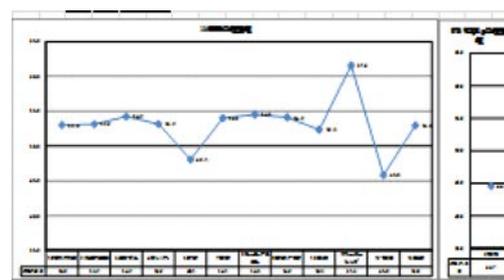
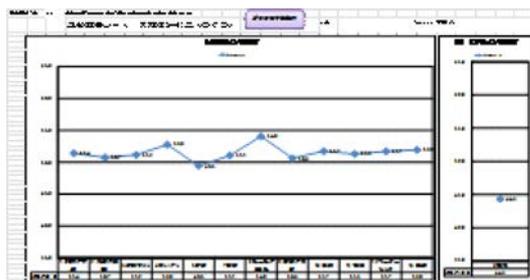
学業の項目を除き、わずかではあるが改善が見られ、リーダーシップの変化が大きい。

・ 2 学年



全ての項目が大きく改善し、特にリーダーシップの変化が大きい。

・ 3 学年



「拒否」や「学業」に若干の落ち込みはあるが、6月以降、全ての項目が改善し、特に、リーダーシップの変化が大きい。

エ 生徒の変容した姿

自己理解・他者理解及び人間の多様性について、理解が深まり、意見の違いがあっても相手を尊重する態度や意見のすりあわせ、傾聴などの態度が見られるようになった。さらに学習に取り組む姿勢にも積極性が見られるようになった。

2 課題

生徒は、集団カウンセリングなどの取組において、自己理解や他者理解そして個々の多様性についての理解を深めた。しかし、理解したことを踏まえ、日常的・恒常的に行動することが十分にできていない状況がみられる。また、様々な場面で自分の良さを発揮できない生徒がいることから、自己表現力を養い、進路の活動の中で、自己実現につなげていく必要がある。

3 次年度に向けて

本取組で理解を深めたことをもとに、生徒が日常的・恒常的に行動できるようにするため、生徒が自ら考え、そして広い視野をもたせるため、様々な場面を設定した体験活動等を取り入れるため学校と地域が連携を密にする必要がある。

北海道奥尻高等学校

課程 全日制
 学科 普通科
 生徒数 50名

1 取組の特徴

スクールカウンセラーとの連携により、生徒のコミュニケーションスキルの育成及び教員のカウンセリング能力の一層の向上、校内の教育相談体制の確立を図る。

2 取組のねらい

- 1 生徒のコミュニケーションスキルを育成し良好な人間関係を構築する。
- 2 教員の教育相談スキルの一層の向上を図り、生徒が安心して生活できる環境づくりを推進する。

<組織図>



3 取組の経過

- | | |
|---|---|
| <p>5月 緑の募金運動への協力 (ボランティア局)
校門前・前庭の花壇・プランター作り (環境委員会・ボランティア局)</p> <p>7月 校内生活アンケート『アセス』の実施</p> <p>9月 全教員による生徒面談の実施①
外部講師によるコミュニケーションスキルトレーニング①、教員研修会</p> <p>11月 外部講師によるコミュニケーションスキルトレーニング②、教員研修会
校門前・前庭の花壇・プランター片付け (環境委員会・ボランティア局)</p> | <p>12月 性に関する講話 赤ちゃんふれあい体験 (3年)
赤い羽根共同募金運動への協力 (ボランティア局)</p> <p>1月 『ほっと』の実施</p> <p>2月 全教員による生徒面談の実施②
第37回町民スキー大会への協力 (ボランティア局)
性に関する講話 (1, 2年)</p> |
|---|---|

4 取組の内容

<『アセス』(学校環境適応感尺度)、『ほっと』(子ども理解支援ツール) 分析の概要>

- (1) 『アセス』の分析の概要：全学年で青と緑の領域に属する生徒が7割を超え、適応的であると考えられる。
- 【1学年】生活満足度の要支援者が複数みられた。2回目の結果では、要学習支援に属する生徒が0名となった。
 - 【2学年】要学習支援領域に属する生徒や生活満足度の要支援者が複数みられた。
 - 【3学年】1回のみの実施となったが、要学習支援者が複数みられた。
- (2) 『ほっと』の分析の概要
- 【1学年】学習に関連した望ましい行動ができていないと感じている生徒が多い。
 - 【2学年】他者の無理な働きかけに対し、拒否することを苦手とする生徒が多い。
 - 【3学年】望ましい行動について、クラスに働きかけることを苦手とする生徒が多い。

- 1 生徒を対象としたコミュニケーションスキルトレーニング
- (1) ねらい：コミュニケーションスキルを育成し、良好な人間関係を構築できるようにする。
 - (2) 対象：全学年 (2回目は1, 2学年のみ)
 - (3) 内容：齋藤敏子氏を講師に迎え、アイスブレイク、上手な断り方等の活動に取り組んだ。
 - (4) 成果：異学年交流を促進し、アサーションについて学んだ。生徒からは「上手に断るときは、友達を傷つけずさわやかな言い方で言うと相手も分かってくれると思う」との声が寄せられた。



4 取組の内容

2 全教員による生徒面談の実施

- (1)ねらい：自分の気持ちを表現できる場を確保し、生徒が安心して学校生活を送ることができるようにする。また、本校の組織的な教育相談活動を推進する。
- (2)対 象：全学年（2回目は1，2学年のみ）
- (3)内 容：管理職も含めた全教員14名が生徒面談を実施する。事前にアンケートを実施し、生徒は面談者を選択できる。
- (4)成 果：学年を超えた面談の実施により、生徒理解が深まった。

3 ボランティア活動（第37回町民スキー大会への協力）

- (1)ねらい：自主性、社会性、コミュニケーション能力を育み、自己有用感を高める。
- (2)対 象：ボランティア局14名
- (3)内 容：スキー大会の運営協力（アトラクションの準備等）
- (4)成 果：地域住民と交流を深め、大会運営に協力することで達成感を味わうことができた。



4 性に関する講話

- (1)ねらい：性に関する正しい知識と自己の認識を深めさせる。また、性に関わる態度を主体的に選択できる能力を高める。
- (2)対 象：1，2学年
- (3)内 容：奥尻町保健師の佐々木美智子氏、工藤真也氏を講師に迎え、デートDV等について学びを深めた。講話やグループワークを行い、より良い人間関係について考えた。
- (4)成 果：生徒からは「自分の意見を尊重することは大事だが、相手のこともしっかりと考えた上で接していこうと思いました」等の感想があった。



5 次年度に向けて

1 成果

- ア 中途退学者及び不登校生徒数の推移
ともに前年度と同数であった。
- イ その他の指標
現段階では、保健室利用者数に大きな変化はみられない。
- ウ 生徒の変容の姿
コミュニケーショントレーニングの感想から、「最近話す機会がなかった子や、話したことがない子と気軽に話すことができ楽しかった」「良い断り方の言葉一つで、相手に嫌な思いをさせない方法を知った」等の感想が聞かれた。各種取組により、自己理解を深め、コミュニケーションに関する技法を身に付けたことが伺えた。
- エ その他
今年度は本事業により、継続的にカウンセラーから支援を受けることが可能となった。

2 課題

- ・本校は離島のため、連携する外部機関がなく専門的な助言を受けることが難しいことから、早期から計画的に講師の確保に努める必要がある。
- ・『ほっと』『アセス』を今後も継続的に実施し、その結果について詳細に分析するなど効果的に活用する必要がある。

3 次年度に向けて

- ・講師の確保等、早期から計画的に各種取組を実施する。
- ・『ほっと』『アセス』の分析及び活用の方法について教員研修を実施し、個別指導や面談に生かす。